瘡信仰、疱瘡除けの呪物をとりあげ、第Ⅷ章で「文芸作品にみる痘瘡」として「栄花物語」「浮世風呂」「馬琴日記」など小説、日記、随筆、川柳、俳句、短歌、唱歌を紹介している。

最後に、WHOの資料や新聞報道などを引用し、日本最後の痘瘡患者や世界で最後の患者をとりあげ、「痘瘡の根絶」（第Ⅸ章）の様子を記し、「人類は再び痘瘡に襲われることはないか」（第Ⅹ章）というテーマを検証している。

（蔵方　宏昌）

〔思文閣出版：京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、平成十一年五月二十日、四六判、四〇四頁、本体四、七〇〇円〕

磯貝　元　著

『明治の避病院―駒込病院医局日誌抄』

十九世紀から二十世紀にかけて発展をみた細菌学、そしてウイルス学は病を特定し、さらにそれを人びとの視覚の下において本体をあらわにさせたが、そのことは病人が抱えていたそれまでの二重の病苦を追放するという画期的な出来事につながった。

そのひとつは、肉体を苦しめていた病原菌を攻撃する治療薬の開発が進められたことであり、もうひとつは病気の本体がわからず、治癒することがなくて致死率の高い病にありがちな病の意味づけと、それにともなう病人の社会的な差別という事態が解消に向かったことである。

本書が舞台となっている明治中期の社会は、ハンセン病・結核・精神病などが地方によっては家筋の病として捉えられ、病人およびその家族が強い社会的偏見の下におかれていた時代である。繰返し社会を襲ったコレラなどの感染症においても、発生源の多くが都市の不潔な貧民窟であったところから、病がそこに住む人の不衛生やだらしなさ、不道徳、逸脱といったものと結びつき、病人を差別する動きもみられた。衛生警察による人権を無視した隔離策はその動きを助長し、病がもつマイナス・イメージを大きくふくらませることになった。

一八九七年にはコレラ・腸チフス・赤痢・痘瘡・発疹チフス・ジフテリア・ペスト・猩紅熱を伝染病に指定した伝染病予防法が公布されているが、この時においても病への対応は清掃・消毒（清潔法）と避病院への隔離、対症療法が中心であり、救命に威力を発揮した抗生物質の登場はまだ先のことである。

避病院のほとんどは流行の際、臨時に設置されたものであったが、東京府では一八九六年に恒久的な施設を建て、翌年にはそれを東京市へ移管するとともに、常設の避病院であった本所病院を閉鎖している。それ以来、駒込病院は東京市における常設の避病院として機能し、当直医によって日誌がつづられることになった。

本書は詳細な注が付記された「駒込病院医局当直日誌」

（一八九九―一九〇九年）の抄録である。内容は医師の日常の業務や人事異動、入退院・死亡患者数の記録のほかに、当直医や看護婦の愚痴、収容隔離された患者の不安や恐れの気持ち、死に面した患者やそれを看取る家族の表情、非力を嘆く医師の独白など、当直にあたった若い医師の率直な感想がつづられている。避病院の内部から、それも医療サイドからの発言は珍らしく、貴重な第一級の史料である。

（新村　拓）

〔思文閣出版：京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、平成十年五月十日、A5判、五二二頁、本体一三、〇〇〇円〕

小曽戸　洋　著

『漢方の歴史―中国・日本の伝統医学』

本書は長年の畏友、小曽戸氏の新著である。書評などという野暮なことはできようはずもなく、ただ読後感想と内容紹介にさせていただきたい。

富士川『日本医学史』や宗田『日本医療文化史』のような大著はさておき、本書と前後するコンパクトな医学通史、また漢方医学史関係の日中の著述はこれまでもあった。あるものは他書の抜粋に終始する陳腐な内容が一目で分かり、購入を後悔し、のち二度と開くことはない。あるものは確かに斬新な視点と分析に富むが、いかんせん史料ではなく思想で語るために強烈な催眠作用があり、読了まで幾度も気絶させられた結果、とくに得るものは記憶に残らなかった。一方、あるものは刺激的な新見解の連続で、つい最後まで読んでしまったが、その間何度も憤慨して反論を書きたい衝動に駆られた。

小曽戸氏の新著はそれらとまったく違った。まさに一気呵成に読了してしまったし、さすがだなと随所で感嘆し、幾度かメモまでとらせていただいた。かくも新知見にあふれたエッセンスを、ここまで平易にまとめた漢方医学史の書はかつてほとんどなかったように思う。ただ私は小曽戸氏と共に永く研究を重ねてきたので平易と感じたのかもしれないが、専門家以外にも難解な部分はまずないだろうし、漢方や医学史の研究者にも読み応えが十分あるに違いない。それは一に憶測を排し、豊富な原資料に基づき史実を明らかにする氏の研究姿勢によるが、また巧みな内容構成と文章力もあずかっている。

本書は「はじめに」で東洋医学と漢方・中国医学などの用語を説明した後、以下の十章からなる。一章：中国医学の形成、二章：よみがえる古代医学の遺物、三章：神農伝説と『神農本草経』、四章：『黄帝内経』と陰陽五行説、五章：張仲景の医学、六章：六朝隋唐医学と日本、七章：宋の医学と日本、八章：金元明清の医学と日本、九章：江戸時代の医学、十章：日本から中国へ。